

會



報

1961年10月

217

日本山岳会

インドに於ける 最近のヒマラヤ イズム

松田 雄一

インド・ヒマラヤ登山学校の活動状況については会報二〇一号に「インド・登山学校と当会との間の最近における交流」と題して紹介しておいたが、その後も駐日インド大使館付武官A・N・カンナ大佐の在任中は、同氏のお骨折により密接な交流がつづけられていた。そしてその間の幹旋により日本製装備一式を寄贈して感謝されたことも忘れることはできない。

さて昨年十一月十七日、日高会長は、ネパール電源開発調査行の帰途、ダーシリンのヒマラヤ・登山学校 (Himalayan Mountaineering Institute 略称H.M.I.) を訪問された。たまたまギャンシン校長はボンベイに講演旅行にでかけており、又技術指導主任のテンジンもアドヴァンス・コースの一行を率いてカンチェンジュンが山麓のゾンリにでかけており、面会することはできなかったが、留守番の人のよきようなシエルパの案内で同校の博物館を見学してこられた。そしてその際、同校ベシック・

ク・コースの規則書、入校申込書健康診断書の様式、H.M.I.のニュース・レター、インド・エヴェレスト隊のブリーフ・レポート (スポンサリング・コミッティー刊) 等を手入れされてこられたので、簡単に紹介し、併せて最近におけるインドのヒマラヤ登山の活動をのぞいてみることにする。

H.M.I.は一九五四年十一月四日に開校されたが、最近に至るまで、同校の活動状況を報ずる公式の資料は何も刊行されていなかった。そのためベシック・コースを修了した卒業生も横の連絡がとれず、各地に分散しているだけの状況であった。こうした卒業生の声もあって Half-yearly News Letter を刊行することになり、一九五九年六月に第一号、一九六〇年一月に第二号、同年六月に第三号が刊行され、第四号も既に刊行されている筈である。

ニュース・レターの内容を見ると、同校の建物、博物館、図書館保有装備の状況、ベシック・コース及びアドヴァンス・コースの状況、寄贈品 (この中には、日本山岳会が寄贈した装備品もリストアップされている) ベシック・コースは既に二二回の講座をもち、四六五名の卒業生を送りだしている。アドヴァンス・コースの

方も、各ベシック・コース課程修了者の中から四〇六名を選抜して、毎年二四名をトレーニングしている。

こうして養成されたインドの登山家達の最近の活躍はめざましいものがある。H.M.I.の卒業生たちは、インドの各州にクラブをつくり、大学の山岳会をつくっている。そして最近はこのクラブ単位のエクスペディションもさかんになり、インドのヒマラヤ登山も地についてきた感じがする。そこでこの機会にここに至る迄のインドのヒマラヤ登山史を眺めてみることにしよう。(但し一九五七年以前のものは資料乏しく洩れがあるかもしれないがこの点御寛容ください)

一九五一年
●ヒマラヤン・クラブのメンバーでインド陸軍大学のスタッフであった R. Greenwood と Gur dial Singh はインド隊初の七、〇〇〇 m 峰登山に成功、六月二三日、ダワ・トンドゥップを伴いトリスル (七、二〇〇 m) の第三登を行なった。

一九五二年
●ベンガル工兵聯隊 (Bengal Sappers) の将校達は英人ハロルド・ウィリアムス (Lt-General Sir H. Williams, K.B.E.) に率いられてカメットを試登し、ゲ

ルディアル・シンは頂上直下二〇〇 m の地点にまで達した。

一九五三年

●P.N. Nikore 他三名よりなる隊は、五月六日、パンチ・チュリ (六、九〇三 m) の初登頂に成功。

●ウィリアムスに率いられたベンガル工兵聯隊の登山隊は再びカメットをめざしたが、雪の状態悪くカメットは断念、第五キャンプよりアビ・ガミン (七、三三三 m) に方向を変え、N.D. Jayal, Pemba, Poran Singh の三名は、南側からの新登路による登頂を行った。

一九五四年

●アラハバート・ヒマラヤン・マウンティニアリング・クラブの S.P. Agarwal 他三名、五、六月ガングトリ地方を探査。

●アグラ大学の Dr. M.S. Man 等スピッティ地方を科学調査。

●グルディアル・シンを隊長とする一隊はカイラス周辺に入り、シラ・カン (五、八七三 m) の第二登をなした。

一九五五年

●H.M.I.とベンガル工兵聯隊山岳会とは合同してインスティテュートのアドヴァンス・コースとして N.D. ジャヤール少佐以下一〇人の遠征隊をカメット

(七、七五七m)に送り、カメット
の第二登に成功。
一九五六年

●H・M・Iのアドヴァンス・コース
隊は、N・D・ジャール少佐
を隊長としてカラコルムのサセ
ール・カンリ(七、七六二m)に
向ったが、その登頂には失敗し
た。しかし乍ら隣接するSakang
Peak(七、三六一m)の初登頂
には成功した。

●ヒマヤン・クラブボンベイ支
部の Keki F. Bunsbush は西ド
イツからきた二人の登山家ヒ
ーバードとガルワルのトリスル
に向い、六月一日、ブンジャ
ーとガルツェンによりトリスル
第五登に成功。更にヒーバード
弟は二人のシェルパをつれて夜
間登山を試み、六月一七日早朝
第六登に成功した。
一九五七年

●H・M・Iのアドヴァンス・コー
ス隊、ナンダ・デヴィに向い頂
上直下に達するも失敗。
一九五八年

●H・M・Iのアドヴァンス・コー
ス隊、五月一日、ついに八、〇
〇〇米峰の一つチョー・オエー
の第二登を果した。(この隊につ
いては会報二〇一三〜四頁に詳述
) ●Capt. N. Kumar をリーダーと
する Army and Navy Expedi

tion. トリスルに向い、六月四日
Lt. Mehta とシェルパのニマは
トリスルの第七登に成功した。

●Gurdial Singh (一九五一年の
トリスル登頂者)をリーダーと
する三名の登山隊は二名のガル
ワリ・ポーターを伴い、六月一
九日、ナンダ・デヴィ南稜上に
ある。ムリグトウニ峰(Mright
uni, 六、八五五m)の初登頂に成
功した。

一九五九年
●H・M・Iのアドヴァンス・コー
ス隊は Pre Everest Expediti
on と称して翌年のエヴェレス
ト登山に備えて偵察とトレーニ
ングを行った。
●Inst-Lt. M.S. Kohli をリーダ
ーとする All Naval Expediti
on は五月二五日、ナンダコー
ト(六、八六七m)の第二登に成
功した。

●Indian Army Regiment of A
rtillery's team の Capt. Jagjit
Singh をリーダーとする六人
の登山隊はバンダルブンチ一峰
(黒峰六、三八八m)を攻撃、六
月七日三人の隊員は一人のシェ
ルパを伴い、第二登に成功。翌
八日、他の三隊員と一シェルパ
も第三登を果した。
●Air Commander, S.N. Goyal
を隊長とする Indian Air For

ce Expedition は一〇月一七日
チャウカンバ(七、一三八m)の
第二登に成功。

●アラハバード大学山岳会はボス
ト・モンズーンにナンダ・コー
トの第三登を企図せるも悪天候
のため失敗。
一九六〇年

●Ramesh Chatterjee をリーダー
とする七人よりなるカルカッタ
の登山隊は Kalindi Pass を経
由して、ゴムクとバドリナース
の間の地域を探索した。

●クマオン・マウンテンアリンゲ
・クラブは B.C. Bhatt をリー
ダーとする登山隊をナンダ・グ
ンチへ送った。

●ジャバルプール大学山岳会はボ
スト・モンズーンにカブル・地
区へ登山隊を派遣した。

●ロバート大佐をリーダーとする
英・印・ネパール合同軍人

登山隊(Service Himalayan
Expedition)は五月一七日アン
ナ・ブルナII峰の登頂に成功し
たが、この隊の中にはバンダル
ブンチの登頂者、ジャジッド・
シン大尉や、H・M・I出身者
P シヤムシェル・ラナ大尉等も
含まれていた。

●エヴェレスト

インドで初めての国家的規模を
もつ登山隊であり、隊員二〇名

シェルパ六〇名、ポーター六〇
〇人という規模は世界最大の登
山隊の一つであり、この隊はこ
の一〇年間に発展したインド登
山界の実力を世に問うべき、国
の名譽をかけての登山隊でもあ
った。事実、隊の進捗状況はたえ
ず無電でニュー・デリーに送ら
れニュー・デリー政府から発表
されていたのをみてもわかる。

このエクスペディションは単に
H・M・Iのアドヴァンス・コー
スといった意味ではなく、全イ
ンドを代表するチームであ
り、隊の経費等は N.R. Pillai,
I.C.S. をチェア・マンとする強
力なスポンサリング・コミッテ
ィにサポートされていた。隊の
構成をみると、H・M・Iのギャ
ンシン校長(Brig. Gyan Sing
h)をリーダーとし、隊長代理
には一九五六年トリスル隊の隊
長であり、一九五八年のチョー
オエーではN・D・ジャールが
たおれた後の指揮をとった。
K.F. Bunsbush が推挙された。

この他にチャウカンバとニルカ
ンタの経験をもつ Flt-Lt.N.S.
Bhagwanani、一九五八年のバン
ダルブンチと五九年のムリグト
ウニの経験をもつ R. Vikram
Singh の経験者、一九五三年に
エヴェレストの高所で経験した

シェルパで現在H・M・Iのイン
ストラクターをつとめている
ダ・ナムギャル、アン・テンバ、
ナワン・ゴンブを含み、残りの
隊員も気象観測を担当したイ
ンド気象庁の S.U. Shankar
Rao を除き、全員がH・M・I
の Ex-Student であり、しかも
この中八名は前年のブレ・エヴ
レスト・エクスペディション
に参加し、準備と偵察に当って
おり、この中にはチョー・オエ
ー登頂者である Sonam Gyaso
も含まれていた。

エクスペディションは二月二〇
日ニュー・デリーで結成され、
三月六日ジャイナガルよりキャ
ラヴァンを開始した。四月二三
日にパンボチエにアクライマテ
ィゼーション・キャンプを建設、
以後二週間に亘り高度馴化訓練
を行っている。こういったこと
ろは英国隊と全く同じである。
かくして四月五日ベース・キャ
ンプ建設、一〇日C・I、一五日
C・II、一七日高度二、二〇〇
呎のウェスターン・クームにア
ドヴァンス・ベースたるC・IIIを
建設、四月一日よりローフェ
フェースの登路開始が行われ、五
月二日二四、〇〇〇呎にC・V、
五月九日にはサウス・コルに到
達、全員B・C及びA・Bへ休養

に降り頂上攻撃に備えた。こう

して彼らはインド気象台からの

モンズーンに関する情報を待機

し五月二十一日アンダマン海に

モンズーンが発生し、六月二日

頃エヴェレスト地区に到達する

見込というニュースをきいて後、

直ちに頂上へ向い進発した。登

頂隊はシェルパのインストラク

ターをリーダーとして二・三名

よりなるものを三隊予定してい

たが、この時になって有力なロ

ープ・リーダーであるダ・ナム

ギャルが急に病気になるので

二隊に変更し、第一隊、ナリン

ゴンブ、ソーナム・ギャッツ

オ、ナレンドラ・リマール、第

会 告

近時、海外登山計画の幅振りを
見ると、日本山岳会内で事前に調整
を行った方が多い場合が多いと考え
られます。

従って、来る昭和卅七年度、国際
スポーツ行事用外貨枠の割当を受け
ようとして、考慮されている海外登
山計画につきましては、来る十月十
五日迄に必ず日本山岳会に到着する
よう御送付下さるよう御願ひ致しま
す。

昭和卅六年九月十五日

各位
社団法人 日本山岳会

日の両日登頂を執行することに

した。第三隊に予定されていた

A・B ジュンガルワラにはサウ

ス・コルに於ける登頂隊サポー

トという登頂と同様に重要な任

務が与えられた。かくして二二

日にC・Vに入った第一登頂隊

は、三日サウス・コルのC・VI、

二四日C・VIIへと順調に入っ

た二五日の登頂決行日は強風と

悪天のため登頂できず、多くの

苦難の後二八、三〇〇呎に達し

てサウス・コルに引返した。以

後降雪が続く、山の状態が危険

になったので、キャン・シン隊

長は撤収を指令し、五月二七日

にはB・Cへと下山した。かくし

て第一回のインド・エヴェレス
ト登山隊は頂上を目前に見なが
ら失敗にきし、六月三日ナムチ
エ・バザールへ引かえし、カト
マンブへと下山したのである。

たまたま、北面ノース・コルよ
り中共の登山隊がエヴェレスト
を攻撃し二五日の未明午前二時

に登頂、天候悪化の直前に懸案
の偉業をなしとげたので、イン
ド隊の功績はすっかり陰をひそ
めてしまったが、正攻法を以て
エヴェレストに作戦を展開し、

少しの危惧もなく二八、三〇〇

呎迄達し得たということは、戦
後誕生したインドのヒマラヤイ

ズムが、十年間という極めて短

時日の間に、欧米の先進国に比

して少しも遜色ないまでに生長

したことを何よりもよく物語っ

ているといえよう。

そしてこうしてインド登山界の

バックボーンをなしているH・M・

Iの業績を忘れることはできな

い。現在H・M・Iには一九五八

年、チヨ・オユーで病死したN・

Dジャヤール少佐を記念するジャ

ヤール記念基金がありこの総額が

一二〇〇〇ルピー(約九十万円)

に達しているが、インドのヒマラ

ヤ登山を語る上に、N・Dジャヤ

ール少佐の功績は忘れることがで

きない。

一九六一年プレ モンズーンに
は、一昨年ナンダ・コト登頂に
成功し、昨年はエヴェレストで活

躍したM・S・コリーを隊長とする
強力な登山隊が、中央ネパールの
未踏峰アンナプルナ峰(七、五

七六m)に向い、五月六日、天候
を巧みに掴んで、隊員二名、シェ
ルパ二名により初登頂に成功した
と外電が伝えている。これは七、

五〇〇m以上の初登頂ピークとし

ては、インド隊初の快挙であり、
インド登山界の実力を世に問うの
に十分なものである。

月一三日、O・Pシャルマ他によ

りその登頂に成功したと外電が伝

えている。

インド隊による、登頂ピークも

トリスル、パンチ・チュリ、アビ

ガミン、カメット、セーカン・ピ

ーク、チヨ・オユー、ムリグト

ウニ、ナンダ・コト、チャウカ

ンバ、バンダルブンチ、アンナプ

ルナ峰、ニルカンタと十指を越

えるようになった。しかしこの中、

七五〇〇を越えるピークはアンナ

プルナ峰だけで、他の初登頂ピ

ーク、パンチ・チュリ、ニルカン

タ、セーカン・ピーク、ムリグト

ウニは何れも低い。そしてこの他

はすべて第二登、三登といったも

のである。この点、日本隊の登頂

艱や穂高の様に既にトレーニン

グの場としてとりあげられているの

かも知れない。

来年は一九六〇年の第一次エヴ

エレストに続き、強力な第二次エ

ヴェレスト登山隊を派遣すること

が、発表されている。その成功を

祈ってやまない。

(三六、八、一五)

◆第二一五回小集会◆

一、日時 十月十日(火)午後六時

一、場所 体協会議室

一、講師 篠田軍治氏

一、演題 P 29 遠征について

本 号 目 次

●インドにおける最近のヒマラヤイ
ズム

●日本のサマヴェル夫妻
●思い出すことども

●高校登山講習会
●アイスランド・飯豊・六甲

●北日高の山旅
●会員通信

●二十年目の秋田駒
夏山歩き

●会務報告
●東京支部報告

●図書紹介
●ベル・アンデス通信

故ガルツェンの遺族のための募金にご
協力下さい

日本のサマウエル夫妻

松方三郎

先史時代の登山家

「自分みたいな、いわば先史時代の登山家が、日本に来て諸君にこんな歓待をうけようとは思像もしなかった。」

これはサマウエル老夫夫妻歓迎の山岳有志の小さな集り、老が語ったことばの一節である。

サマウエルという名をはじめてわれわれが知ったのは一九二三年のエヴェレスト遠征の時のことだった。一九二四年の遠征ではサマウエルはノートンと二人で北側のルートを一八〇〇フィートの高さまで登っているのだから、その当時、ノートン、マローリーと共に大事な登頂隊員の一人と見られていたことは明らかである。一九二四年といえど今から三十七年前のことだ。山登りの世界のそのものの発展から考えれば、サマウエルのいう通り「歴史以前」の昔話になるかも知れない。しかしウェッスターホルンがアルプスの初心者入門の山となった今日でも、アルフレッド・ウィルスは近代アルピニズムの開祖であり、マッターホルン

のスイス・ルートがいかに陳腐になっても、ウイムパーは山岳博物館にいけばどこでも護り本尊に祭られているのだ。これはただ山の連中が古きものを尊重するということから来ているのではない。山登りをすればするほどいかに自分達が先人の業績におうところが多く、いかに彼等の肩の上に乗っているかを身にしみて感じているからなのだ。

サマウエルさんの場合にしても同じことだ。当人はどう考えているにしても、われわれからすれば、何としても、残り少なくなった前期エヴェレストの一人なので、その訪日はわれわれにとつてはこの上もなくうれいことであり、日本の登山界としては、一つの特筆に値いすることなのである。

サマウエルは今年七十一、夫人は六十二、一九二三年以来のインド在住だから、インド生活はほとんど四十年に近い。サマウエルの著書「アフター・エヴェレスト」を読んだ人は知っているだろうが、サマウエルは一九二三年の遠征の時にインドを歩いて、その住

民の貧困と惨めさに心を打たれ、とうとうインドにその生活を打込むことを決心し、七十を越すまで、インドの伝道病院の外科医師をしたり、医学校の先生をして土地の人々のために働いて来たのである。そしていよいよ今年で今度引退し、故国英国に引揚げることにしたのでその途中日本によつたのだ。サマウエル夫妻の二人の息子さんは、二人とも医者で、二人ともインドに留って、同じような伝道病院に働いているそうだ。

トランクとこうもり

私はこの前のアルパイン・クラブの百年晩餐会の時彼の隣にすわったから初対面ではないが、今度いっしょに山に行つてつくづく見たのだが、大男である。吉田の刑部でこっそり靴の寸法を測つたら三十一センチあった。

インドで友人から譲つてもらつたというルックはスケッチブックと水彩の絵具一式をいれるといっぱいになるくらい。つまり小学校の子供が担ぐようなものだ。だから、荷物はほみ出してファイバーの少形ストケースが別にあるので、そのストケースを担ぎましようとは何度いっても、いや荷物を担いでもらつちや相いすまぬと、この七十一の老人はどうしてもそ

れをくれないのである。そしてそのストケースを片手に、もう一つの手にはボンベイ製というビーチ・パラソルほどもあるような大きな傘を握っている。そんな姿で、最初の日は小海から白樺尾根を白駒の池までのし上つたわけだ。

同行は藤島敏男とぼく。白駒の小屋には交野マッキンレイが令嬢を伴つて待つていてメス係りを勤めるという寸法、浅間噴火や美濃の地震で、荒れ込みであつた天気も大事にいたらず、まずまず上々のうちであつたが、何としても気になるのは例のストケースだ。何とかしてあれを捲上げねばならぬと三人とも意見は一致しているのだが、誰がどうして猫の首に鈴をつけるのかということになると名案がなく、そのままねてしまつた。

二日目は、まず第一に、すきを見て、ストケースを手早くぼくの背負い子につける。もちろんそれからはなかなかのワウワウだったが、どうやら納得してもらつて出発。ニューに登つて、それから中山峠、ここで本峰へ縦走する交野一行と別れ、われわれは黒百合平からのガタガタ道を渉へ。一時半とかのバスにはどうやらすべりこんだが、それから茅野までの下

り道には全く驚いたようだった。日本人以外にはあの道で自動車を運転できるものはあるまい、というのがサマウエル老の意見であつた。

茅野からは大月経由で吉田へ。藤島は暑い東京へ。急ぐ用があるとは誰も思わぬのだが、いい出した以上一步も退かぬ人物故、老夫妻とぼくと三人で電車で谷村の谷をさかのぼる。果してうって変る涼しさである。

『凱風快晴』

三日目の朝は快晴、宿から見上げた朝の富士は、北斎の赤富士みたいだと、画家であるわが賓客をいたく喜ばした。滝沢はハイヤー、七合のとつつきまでは三人で馬。万一に備えて刑部から拉し來つた長島青年は若いから徒歩である。そして夕方本八合の「ホテル」に入った。雲海のたなびく中を甲州から秩父にかけての連山が出たり消えたりして行くのをスケッチしながら、とうとう真ぐらになるまで食事もとらない。そして小屋のあるじの請うにまかせてマジックで羽目板にエヴェレスト北面の図を大きく描いた。まるで昨日見て来た山をかいてでもいるかのように、よどみなく描いていくのはまことに美事だった。一九二

四年の『エヴェレスト』には彼のスケッチが幾つも色刷りになっていることは御承知の通りだ。



(北八つ岳中山峠にて、Somervell氏夫妻と松方、藤島、岡氏とは旅)
温泉に下り、僕と娘は夏沢峠に出て本沢を経て松原に赴く。

Aug. 20, 1961. 交野武一

翌八月廿二日には御来迎を拝んで頂上。ヒマラヤははじからはじまで、そしてアルプスも、いやというほど見て来た老先輩がハッ

れた手紙には、こんな風に書いてあった。

「ほんとなら、ただの旅行者の旅に終った日本の滞在が、お陰

だ、南アルプスだといって躍りして喜ぶのを見て、ほくも、ここまでいっしょに来た甲斐があったと思っただ、日本をたつてからく

で、ほんとうの、そして数々の経験として、生涯の忘れられない思い出になったことは有難かった。中でも富士登山は多種多様な喜びの連続だった。昨年、私の山の友達の一人は日本に行くのはいが富士山はよせ日陰も何もない、だだ長い、疲れるだけの山だ」と私にいつてくれたが、ある意味ではこれも当ってはいらぬ。しかし刻々に変わっていく景色や、一つ一つの小屋のたたずまい、山の上で出合う人達、頂上からの素晴らしい眺め、……どれもこれも忘れ難い。まったく何ものにも変え難い山登りだった。……ハッも楽しかった。森の中の長い登り下り、そして、同じように山の好きな人達と一緒に日々は全く楽しかった。すきやき屋でのアルパイン・ディナーも忘れられない……。」

最初に引いたサマウエルさんの言葉は、そのアルパイン・ディナーの時の挨拶の言葉である。

夫妻は二十六日に出帆、アメリカ経由で帰国の途についた。二十六日は火祭りで、私のうちは総出で富士山に登るから見送りは出来ないといったら、一家総出はいないといった。あの人達も英国

の湖水地方やアルプスでは、たまにそんな山登りをやるのである。

英国帰着は十月廿六日の由、何故廿六日なのか、ときいたら、廿八日にはフル・アンド・ロッククラブの年次晩餐会があるから、とのことだった。これは老人達のうちのある湖水地方の有名な山岳会なのである。

数年前に日本に来たサー・ロバート・ロビンソンは、急いでオックスフォードに帰らなければならぬというので、定めし世界化学大会でもあるのかと思つて聞いたら、このノーベルプライザーは小さな声で「オックスフォード・マウンテンヤリリング・クラブの年次晩餐会があるからさ」といったものだ。

似たような人から似たようなことばを聞くものである。

『追記』廿四日の夜の集りには日高、横、三田、松田、浜野、深田、神谷、藤島、成瀬、交野、島田と私達夫婦が出席した。夏であり、急の招集でもあったので連絡も思うにまかせず残念だった。

見るのは初めてだと大喜び、誰もが一九二四年の『エヴェレスト』か『アフター・エヴェレスト』を持って来てサインをしてくれというので、これにも腰を抜かさんばかりだった。こんな本は英国だって今じゃ手に入らないのだと、昔し別れた子供にめぐりあったような感慨をもらっていた。

インドに長かっただけに日本の暑さは苦にならないということだし、食住共に簡素で好悪もなく、何につけてもこちら側に手をかけさせまいという気持が有難くもあり、いつまでも心に残るのである。



川喜田 壮太郎

思い出す

ことども

(カットはマリヤ輸入型録)
(旧好日山荘型録から転載)

西岡 一雄

拙著「登山の小事と用具の変遷」

を書いて決して完璧だと思っ
ていなかった。それどころか、誤謬
多きをひそかにおそれていたの
であった。はたして、開巻第一ペ
ジにして大変な間違をしてしまっ
た「明治一年、アーネスト・メイ
ソン、サトウ西氏村山口古道より
富士登山」これだけで良かった
のに「惟うにこれが外人として富
士山に登った最初の人か」と余計
なことについて筆がすべてしまっ
たのが悪しく、其後、他の人々によ
って書かれた大切な年表の如きに
もついでこれが引用されて誤りを重
ねているらしい。こうなつては私
自身のあやまりだけでは済まない
ことだし且つ自責にも堪えず、愛
に訂正の筆を執るゆえんである。

何故こんな余計な事に筆が飛ん
だかと言えば、サトウ氏等が登山
した明治一年といえは未だ尊王攘
夷が天下いたるところに残ってい
て人心騒然として物騒な時代のこ
ととて外国人がこのこと奇険を
求めて呑気に山登りなぞしてい
られないからと私自身はそう思っ
たのであった。いわんや明治以前
に已に外人登山があろう筈なし、そ
こでつい「おそらく……」と筆が
飛躍してしまつたのである。

ところが、この書物を読んでく
れた荻野和夫さん(会員)がこの
誤謬を発見して「万延元年(一八
六〇年)英国公使サー、ラザーフ
オール、コック氏が多勢を伴れて
横浜から長駆富士登山をした」ま
た「サトウ氏より一年早く、パー
クス夫人が同登山をしている」由
を、出所を明かにして指摘され
た。

これによって、私は「惟うに、
これは……」以下のゆきすぎを取
消さねばならない。それにしま
も、たとい間違があつてもかくべ
きことはかいておいてこそ追々と
こういう新事実が判明してくると
ひそかに喜んでいる。とはいえ、
ようも外人が、ところどころ巷で
浪人により襲撃され現に生々しい
生麦事件と程遠くない時期に富士
登山など出来たものだと思う。殊

にパークス夫人の如き女の身で流
石に英人はえらかつたと感心させ
られた。



GARANTIERT

次に山崎直方先生と大井上義

近先生とが、明治三十五年に白馬
岳登山に、山崎さんはルックザッ
クとピッケルとを使った。此の事
実から考えると、或は登山者をも
此時已に穿いて登られたのではな
いだろうか。荻野さんはこんな事
をも教えてくれた。私は山崎さん
がいち早くルックザックもピッケ
ルも共にあちらから携行して帰朝
されたことは知っていた。されば
こそ三十七年に石川光春氏がそれ
を借りて見本的に造らせたことを
拙著にかいておいた。

しかし、先生自身が白馬で使用
になったことは想像に止まり、出
典不明のため書かなかつた。それ
が三十五年白馬岳とはっきりした
のは私にとつても大層勉強になつ
てうれしかった。

なお、明治四十年に、山崎村太
郎さんが七月、燕岳に登攀し此時
スウイス土産として父から貰つた
ルックザックとシモンのアイスピ
ッケルとを携えてゐたことま
で、これ亦荻野さんによつて知れ
た。私も念のため、辻村さんの著
書「日本の山水」(33・7)を読む
ことによつて、いろいろなことが
解つてきた。

そうすると推理があるけれど
も、当時ドイツに留学中の大関久
五郎先生、また大塚専太郎先生を
も、そうした仲間に入れて考えね
ばならぬことになるが、これには
歴とした記録がない。辻村さんは
此時山にココアの如きハイカラな
飲料をも携帯されたことが判つ
た。(註、二)参照

私がシュークリームというお菓
子やココアを初めて知つたのは明
治四十年で、京都二条寺町角?
にあったカギヤ? という店で、
この店は当時の三高生がよく立寄
つてピアノを弾いたり、きいたり
して西洋菓子や喰つた。この店は
そうした学生相手のハイカラな店
であつたから、おそらく此の少し
前からココアやシュークリームが
少くとも関西ではやつと学生達に
喰われ出した初期時代ではなかつ
たかと惟われる。大阪にはまだそ

んなハイカラな店は一軒もなかつ
たことだけは確かであつた。



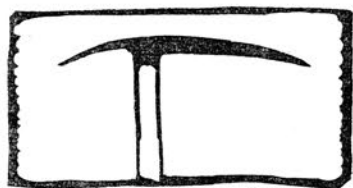
大正十二年夏、村井米子さんは
穂高、槍縦走をしておられる。翌
年の冬にも積雪の穂高に登山さ
れた。筆は憤みたいが、いずれも
女性としての最初の記録のように
思われはしないか。

一九二八年、ホルメン・コーレ
ン、スキー大会に選手として出場
した麻生武治氏並びに竹節作太
雨氏は共にあちらでウインドヤッ
ケを知り、日本へ持ち帰つて見本
として思い思いにつくらせている
から、ヤッケをひろめたその功績は
この二人が等分にもつべきであ
ろ。その上にヘルゼット中尉の来
朝はその流行に拍車をかけた。

しかし、それらよりは数年はや
く一九二四年頃、已に東京にあつ
た保々近藤合名会社(註、二参
照)の初輸入があつたと聞くか
ら、多分これがヤッケ其物のらん
しょうだらうと考えられる。関西

人がこれを知ったのは明らかに佐友山岳会の人々、及び辻谷幾蔵氏等が、関温泉で学習院の人達を見たのがはじまりで、その形がイカに酷似するところから、永らく我等の間にイカの名称で普ねく知られていた。

大島亮吉氏が、バドミントン・スタイルの一文を登高山にのせて以来、とみにパイプ煙草が岳人の間に重宝がられ、別に大して気取るといふ程ではなかったが舶来の一本、それはダンヒルかスリーピーか、とに角、その逸品をポケットに忍ばせて小休み毎にそれを取り出してスパスパ吸うというのが常套であった。殊にお昼の大休止や夕食後の一ふくはパイプ煙草の醍醐味であって特にうまく、パイプに関する文献やら随筆の類は矢次ぎ早やに出版されひろく愛読さ



れていた。それもはや時勢であって、現在ではあんなうまい煙草も贅沢も、とても望んでも出来やしない。

大正十四年三月に、西堀、桑原他数名の三高生が積雪の北岳、間ノ岳、仙丈岳へ登攀した際、何もかもその時の装備が日本製のものの計りで他のパーティーとは対照的なのが面白い、というような書きぶりを拙著に示したけれども、そうではなく、あちらのよき用具はいち早く採用して此人達はむろん常に使用していたのであったけれども、桑原さん他二、三の人は和製のピッケルをもっていたということである。

その前年、今西錦司さん、西堀栄三郎さんらが開業してまもないマリヤ運動具店へおみえになつて、折から通関を済ませて堂島川を廻り、渡辺橋の河岸についた計りの登山具をまだ水揚げもすましてない舟中で、シュタイグアイゼンやらピッケルやらを蠟紙に包んであるのをひき出して取外したことを覚えていた。

これは今から考えても感激のひとまであって、三高の旅行部とは已にそういう進歩的なものであったなればこそ、ぞくぞくと今日もなお輝かしい登山の業績をのこす

のである。

その頃、むろん、高価な舶来品に手を出す人は一部に限られていたから、輸入するにもなるべく手持ち品を鮮くするために予約を集めていた。その予約を納入するため京大の農学部に行き、那場と木原の両先生に、ランタン、そしてコッハーの如き物をお手渡しした。



那場先生はやすいといわれ、木原さんは高いと言われた。どちらにも、私は一寸面喰った。今から考えてみると、那場先生は已に教授であり、木原先生は北大から赴任早々の若手で、多分ご自分の収入の点から一方は安い、一方は高いとおっしゃたのではなからうかと推察された。

また、大正十一、二年頃、マリヤ開店まもなく、当時北大学生であった加納一郎さんを店にお迎えして、沢山なスキーや登山用具を買って頂いたことがあった『山とスキー』で已に有名であった加納さんが案外にも小粒で顔色が銅色

であったのは一寸意外な感じをもった。角帽、金ボタン、制服の加納さんを今では知る人も稀になったことと思う。

慶応の山県さん、安場さん、いずれも今は故人。なつかしい思い出の人であった。山県さんが重い鋏を抱えていそいそと去ってゆかれる姿を思うと、夢のような儚さを感じる。

安場さんとは後、槍ヶ岳へ行を共にして、一夜テントで眠った。その翌くる日が腹痛、その儘、松本病院へ担ぎ込まれて病院で急逝された。多分盲腸の手遅れのためと思われる。かなしき思い出である。

私はこの前『上高地公園』をこの会報に書いて、かわりようの甚しいのに驚いた。

登山用具も同じことである。テントの生地一つさえ、一本の釘でさえ、またピッケルの如きものでさえ、いたく改善され新しい良品が出来ている。

かわらぬものは山のみだ、といいたいが実はそうではない。山も年々かわっている。みちが縦横について山はひらけた。穂高の北尾根を攀じのぼるのに、順番を待つてやっと一步前進という有様、いまに喜作新道を縦走するのに一組

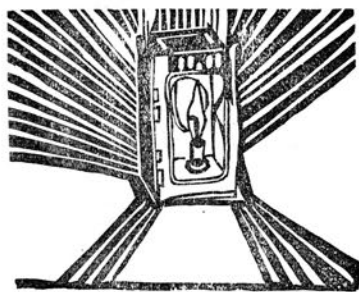
ずつクジをひいて、数字の示す番号に従って次々とのぼってゆく時期がくるのではないかと思われる。

藤木さんが曾て、『登山の道義観』について書かれたが、安全第一のためと凄しいファイトの前には、そんな片苦しい道義の觀念などけし飛んでしまつて、いまや岩を毀ち木を倒しあぶみを踏張り、ふいごで運ばれても唯のぼりさえすればよいということになった。かくて老兵は追々に消えてゆく。

(三六・五・二三)

(註、一) ココアについては『日本の山水』一八〇頁に『燕岩の花崗岩峰の珍らしい景色を前にして残雪をととした水に砂糖とココアを混ぜて飲んだ』と記されている。

(註、二) 名誉会員 近藤茂吉氏談「当時スイス、チューリッヒ、H. Snaub & Co. から輸入した登山用具一揃の中にウィンドヤッケがあった。」



高校登山講習会

日本山岳会・全国高体連主催

場所 立山周辺
期 日 八月十七日～二十一日

全国的な登山技術の向上と登山界の正常な発展を図るため、とくに次代の日本登山界にならう高校生に指導にあたられている先生のために、全国高体連、本会共催で高校登山講習会を開催した。

講習内容は、もっとも初歩的な登山(夏山)の基礎技術訓練、および高校生の登山に必要な諸問題の講義、討論を通じて基礎技術全般について研修した。

△受講者資格▽

I 受講者は各府県2名とし、直接高校山岳部の指導に当たっている教員で各府県高体連会長、登山部長の推薦する者とする。各府県での選出方法は任意とする。

II 年令はなるべく35才以下の男子教員とする。

△装備、食糧▽

- 1 共同装備必要なし
- 2 個人装備、夏山装備(ピッケル持参、アイゼン、シニエラフ、岩登り用具は不要)
- 3 食糧 一般食糧持参必要なし

△行動日程▽

八月十七日(木) 富山駅前集合

(AM八、〇〇) 電車、ケーブル、バスで弥陀ヶ原まで、立山荘で開講式(一一、〇〇) 二、〇〇) 日高会長挨拶、昼食後出発(雷鳥荘着(PM四、三〇))

講習会の主旨説明(浜野チーフリーダー)、講師紹介、隊編成(PM七、〇〇) 九、〇〇)

八月十八日(金) 起床、朝食後A、B二隊に分けて実技、訓練(AM七、〇〇) PM四、〇〇) 夕食後講義、懇談(六、〇〇) 八、〇〇)

講師金坂一郎(高校登山の限界) 八月十九日(土) 起床、朝食、内蔵助谷上部にて実技(AM八、〇〇) PM三、〇〇) 夕食後講義、懇談(PM六、三〇) 八、三〇)

△講師村木潤次郎(遭難対策と予防) 八月二十日(日) 起床、朝食、A B二隊に分けて実技、訓練(AM七、〇〇) PM四、〇〇) 夕食後講義、懇談(PM六、〇〇) 九、〇〇)

△講師伊藤久行 八月二十一日(月) 起床、朝食後反省会(AM七、三〇) 一、〇〇) 三、〇〇) 閉会式(AM一〇、三〇) 一二、〇〇) 挨拶 日高会長、講師浜野チーフリーダー。終了後解散。

△隊編成▽

本部

チーフリーダー 浜野 正男

サブ・リーダー 片桐理一郎

サブ・リーダー 高橋 進

マネージャー 川上隆、徳久球雄

ドクター 田村扇一、長尾徳夫

講師 日高信六郎、伊藤久行

(Aグループ担当講師)

○金坂 一郎

相沢 裕文(A1北海道、岩手

宮城、群馬)

中島 伊平(A2埼玉、東京、

山梨、静岡)

山野井武夫(A3福井、三重、

和歌山、岡山)

高橋 進(A4鳥取、山口、

香川、高知、佐賀)

(Bグループ担当講師)

○村木潤次郎

村田 茂(B1青森、秋田、

栃木、茨城、富山)

酒井 敏明(B2神奈川、愛知

新潟、石川)

佐伯 富男(B3滋賀、京都、

兵庫、大阪、鳥根)

菊島 芳彦(徳島、愛媛、福岡

熊本、鹿児島)

補助員

土肥明大山岳部員、井沢早大山

岳部員、遠藤立大山岳部員

富山連絡員

石坂久忠、河内 清

高体連本部

土屋憲三(高体連登山部長)

△参加者▽

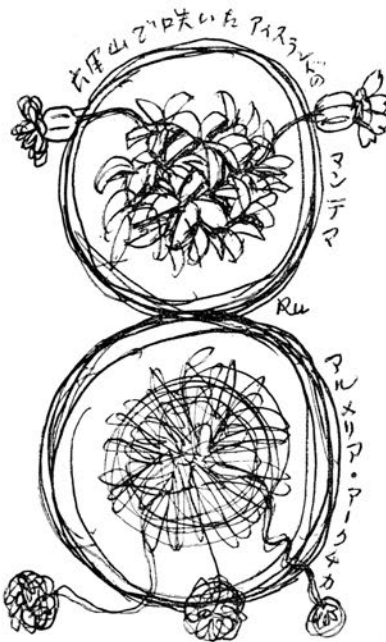
北海道、渡辺義男(帯広三条高)

岩部明(妹背牛高)、青森、鈴木一

好(八戸高)、秋田、宇佐美晃一

(横手高)、岩手、泉山雅男(岩手

高)、宮城、小山秀哉(気仙沼高)



アイスランド・飯豊 六甲

田中 薫

七月下旬の十日間、東北の山旅をしました。四〇年めの月山と、飯豊山が中心でした。

大学と高校の姪をお伴にしたのですが、老年の体力確認には手ごろな尺度でした。飯豊は予想以上に氷蝕資料豊富でした。

それに東北の山は花・人・食とも新鮮で東京圏内の山より少くとも三〇年は若い感じであれしくなりました。

八月はここ六甲の山小屋で仕事をしています。六甲山高山植物園から車が迎えにきたので行って見たら、昨夏アイスランドで採集してきた極地植物の種子が十数種

みごとに成育ぶり、なかでもタネツケバナ、ムシトリスミレ、チヨノスケソウの仲間は大成功、マンデマ、アルメリア(アークテイカ)ピオラ・トリカラの類がいま開花中です。現地と開花期を同じくするのも一興。だいたい旅の思出を六甲でくりひろげるのはこれに限るようです。

スイスで市販の種子も試してみましたが、育ち、エーデルワイスの如きは一年で大株になり、来年は量産開花の見込み確実で、ブローチかペンダントに仕立てティール土産のお株をうばえとたきつけています。

それにしても園長北村博史君の情熱と栽培の神様、六十八才の芝田音吉翁には帽子をぬぎました。(三六、八、一二)

—カット— 筆者

渡辺勝(宮城農高)、茨城、大津八郎(笠間高)、栃木、関根利勝(日光高)、津久井隆夫(栃木高)、群馬、宮内堯夫(利根農高)、根岸晃(渋川高)、埼玉、菊池尹(浦和高)、中村滋(児玉高)、東京、真田治彦(京北高)、神奈川、重田保志(横浜市立南高)、山梨、立川実造(峡南高)、富沢整(韮崎高)、静岡、佐藤敏(静岡高)、氏原毅(静岡市立商高)、新潟、佐藤暢夫(新潟商高)、岡重吉(柏崎高)、富山、尾井和男(上市高)、山崎秀直(桜井高)、石川、北木邦彦(小松高)、新谷喜昭(鶴来高)、福井、齊藤実(福井実業高)、愛知、塚本敏(名古屋高)、大岡幸雄(安城高)、三重、伊藤菅氏(津工高)、高橋民雄(神戸高)、滋賀、大草叙彦(大津商高)、玉置秀貞(瀬田工高)、和歌山、山本達郎(桐蔭高)、藤井淳(新宮高)、京都、山中博(紫野高)、大阪、山本英男(北陽高)、兵庫、菅克己(神戸工高)、加藤正隆(兵庫高)、岡山、小谷憲二(津山工高)、岸正二郎(瀬戸農高)、島根、長井均(瀬原高)、鳥取、深田勝之(米子東高)、小西毅(米子南高)、山口、村田光穂(山口高)、香川、山本祥一郎(飯山高)、佐川文夫(主基高)、徳島、北村健三郎(城南高)、阿部健(鳴門高)、愛媛、加藤嘉重(新居浜工高)、清家一明(吉田高)、高知、村田正徳(芸芸附属高)、上田豊勝(丸ノ内高)、福岡、荒木薫(八幡高)、熊本、福岡商高、佐賀、市場利哉(佐賀高)、熊本、大川原元善(熊本商高)、中田利治(玉名農高)、鹿児島、山下稔(純心女子高)。

以上本部および講師18名、補助員5名、高体連本部1名、受講者59名、計83名。

△講師感想▽

相沢 裕文

登山は一人一人異った理想があるものだ。高校登山も指導する先生によっていささか違った考えがあるに違いない。とくに門外者には想像もつかぬ障害があるものと思う。生徒を登山部としていかに指導しやすくまとめるか、登山部以外の生徒をどうやって安全に山に引率し、楽しませるか……。夜の討論会に聞く話は山に入る前の準備、入山してからの問題からいかに離れすぎている。

私は一つの提案をしたい。多くの悩みを解決するのは、こういう講習会だけではない。例えば毎年夏開かれていた全国登山大会に今回討議されたような問題を大いに論じ研究するのはいいかなものだろうか。今回の討論は、日本山岳会がタッチする以前の、高校登山指導者間で、もっと検討する問題が非常に多かった。

高校スポーツは、指導する者がその優秀のカギを握っているといえる。登山も同じことである。一番の基盤となるために先生がもっとも山を好きになってほしい。大アルピニストを育てるよう努められるのもよい。学校教育の一環としての教育者の立場をとることもよからう。何れにせよ前述のように指導者個々を高めること

が何よりも大切なことである。

×

反省会などで本講習会の成果につき、主催者側でも、受講者側でも期待していたほどではなかったとの不満の声も聞かれたが、講習内容、方法の改善はもとより必要であるが、受講者の心構えの方が本講習会を益々発展させて行くのに大切だと思う。私は本講習会がなお今後永く継続されんことを切望してやまない。

△感想▽

(連絡員として)

富山支部理事

石坂 久忠

1、各県の受講生の登山技術、登山に対する考え方、研究の方法、生徒指導の方法に、地域的な隔差があまりにもあり、それが講師団の意中に困惑を生ぜしめた原因があったと思う。

2、実技の指導が若干軟性に過ぎはしなかった。

3、高校山岳部の実体の研究不足が目立ったと思う。受講生と共にもっと研究してほしかった。

4、会場地域の自然科学的な部門(地学、生物等)についても地方の権威者を講師に加えたら、その地区の自然に馴れ、指導上の参考になりはしなかった。

5、各県相互の交歓の機会が少なかつた。同じ山の同志としての意味での交歓がはしかったように思う。

北 日 高 の 旅

望 月 達 夫

今年はずいぶん高の山をどこか登ろうという約束は、深田久弥氏が去年の九月渡道したときから結ばれていた。日高も北の方は大分開けてきたというものの、テント持参の旅となるので、橋本誠二君にたのんで北大山岳部の現役三名のサポーターを得た。一行は深田氏、山川勇一郎氏、高沢光雄君、橋本君、それに鈴木、鶴巻、大山の三君と僕の八名。

八月五日、静内から北海道電力の厚意でトラックに便乗、奥新冠のダムサイトに近い事業所に一泊六日、早朝から地下タビにワラジばきで新冠川を遡り、夕刻幌尻岳直下の七ツ沼のカールに幕営、終日数多くの徒渉をかさね、沢登りを続けたあと、数々の高山植物が花をひらいていた天上の楽園のようなカールボーデンに導かれるのは、まさに日高の山の特長といえよう。天候はキリシオン。

七日、早朝一時晴れた空も間も

なく、昨日のような霧雨。スケッチに過す山川氏と「カルカ」造りの橋本君を残し、五人で幌尻岳と戸萬別岳に登る。展望には恵まれなかったが、日高の最高峰に登ったことを喜ぶ。

八日、天気は好転しない。沼のカールをひきはらい、戸萬別岳の頂近くをまいて、戸萬別川Bカールに下る。ボーデンまでおりたら久々に美生岳の方が晴れて、初めて山の稜線に接した。大休止。戸萬別川を下って十の沢の出合に幕営。広い河原で焚火も多く雨もあがったので、おそくまで火をかこんで語り合う。

九日、また小雨午後本降り。ピリカベタヌの合流点まできたら、徒渉と雨でぐっしりぬれた一行は、なんとなく足が重くなつて飯場の一隅を借りて一泊。

十日、久々に青空を見たが日高の主脈はまだ雲のなか。途中からトラックをひろい八千代からバスで帯広に出て六日の旅を終った。

なお時日に余裕のある深田氏はサポーター三名と共に、十勝二股からトムラウシを越え、天人峽温泉へ下って十四日に帰札した。

(一九六一・八月)



石井 鶴三

会員通信

二十年目の秋田駒

横田 敬一

この夏原田之幹氏と植物が多くしかもあまり人のいない山を歩くことを計画し、二十年ばかり前私が登ったことがある秋田駒を選んだ。当時いが栗頭紅顔の少年であった私もいまはしらがの数に氣にかかる年となった。あのときは一人で岩手と駒ヶ岳と二山かける元氣があったが今回は登りには若い原田氏に荷物を助けてもらうことにした。

生保内からバスで乳頭温泉にはいった。七月の土曜日にち合ったせいもあって、乳頭温泉中最も大きいガニ場も湯治や登山の客で一杯で予約してなかった私たちは夜まで待たされた。ガニ場には自炊客用の農家が何戸かあり古いもの

のは百年にもなるという。一般の客は事務所の建物に泊まる。裏手の露天風呂で汗を流したが女性がはいってきたので驚いた。屋内の湯も混浴で土地の人は慣れっこなのだろう。その夜酒宴を開く登山客の団があつたり、隣でマーシャンの音がしたりしたのは時勢であらうか。(ガニ場一泊、六二〇円)

翌朝ガスが立ちこめていたが晴れそうなので出発。ガニ場からすぐ尾根に取りつく道がやさしそうなので登ったが、最近伐採したらしくよく手入れされていた。尾根はブッシュの中を南八幡平から乳頭山にかけ道がつけられ番号入りの指導標も完備しており、ぶんと木の香がただよい快かった。しばらく行くと田代平の湿原となりガスの中に幻の御殿のように山小屋が浮んでいた。ニッコウキスゲの群落は霧に点滅する電灯のように見えた。国立公園なので植物採集禁止の制札がいたる所にあつたが、登山者はよく守っているようであつた。

乳頭山からは広い尾根となりシヤクナゲを交えたはい松帯が続く、それが終ると再び湿原となつた。行きから登山者は土地の人ばかりでほとんどが団体であつた。駒ヶ岳の手前の湯森山の南斜面の

残雪から湯気が立ちのぼり涼しうであつた。少し暗れ間が見えた空がこのころから險悪となり雨がぽつぽつ降ってきた。予定では駒ヶ岳を経て国見温泉におりるわけだったが、久しぶりの遠征にいささかあごを出した私は体力のあるうちに湯森山から笹森山を経て日室鉱山あと(登山バス終点)におりにことに決めた。持参の地図は大正十五年印刷(最近の地図は品切れで入手できず)で駒以北の道は全然なく、湯森山には指導標もなかったが、はい松の中の踏みあとをたどると道はたちまちブッシュに埋もれ下半身ずぶ濡れとなつてしまった。笹森山に着いて靴をぬいたら水がざあと流れ出た。

鉱山の職員宿舎が駒岳山荘に改装されちようど開業したばかりだったので早速泊まったが、はじめから知っていたらここを根拠地とすべきであつた。山荘は一三三八メートルの地点にあるので駒ヶ岳まで登りわずかに四十分である。翌日元氣な原田氏は山頂のお花畑を見に登ったが、頂上で偶然神谷恭氏の一行と一緒にあつた。結局私は二十年目の秋田駒に打ち取られ頂上を目の前にして下山したのである。

(一九六一・八、一一)

会務報告

佐藤久一 朗

九月理事会

七日・ルーム



・十月締切りまでに七十万円位になる見込。会員宛依頼状は会報に同封して発送。

③上高地山荘について (折井)

・七月上旬の大雨による破損の修理が完了。小屋番は現在いないが窓口は信濃支部長宛とする。厚生省に許可申請了解を取付けた。

④クラブ・ルームと上高地山荘の募金について (太田)

・募金額五百万円、内訳、a クラブ・ルーム移転関係二二〇万、b 上高地山荘関係二八〇万、募金その他具体的方法は委員会を組織する。

⑤中華民国台湾省山岳協会訪日友交登山隊について (折井)

・期日、九月下旬より十一月上旬

・場所、日本アルプス中心

・メンバー、蘇梅村他十四名、訪日希望あり。

⑥スイス、ジュネーブ国際登山協会入会について (折井)

・協会の内容について検討したい

⑦京大サルトロ・カンリ遠征計画について (中島)

・明年六月出発予定。

・JACとしては本年は外貨の申請締切りを十月十五日とする。

⑧十月小集会について (中島)

・期日、十月十日(火)

・演題、阪大P29遠征の報告、篠田軍治氏に依頼した。

夏山歩き

越後支部 藤島 玄

七月の第一日曜は飯豊連峰の山開き、越後側四つの登山口を順ぐりまわりで、今年は実川口、来年は胎内口、登山施設を整備して山開きOKとなる。梅雨の霽れ間の二日は湯ノ島小屋から大日嶽、御西岳、飯豊本山へと、花と雪に飾られた尾根歩き十二時。翌朝は大風雨の中、弥平四郎へ下った。

七月二十三日は苗場山で奥国体予選登山。松方三郎さんと頂上の遊仙閣へ辿りつき、野反湖から白砂山経由の武田博士一行と遭遇。

八月十四日から飯豊連峰集中登山、胎内口より二ツ峰、門内岳の新道を行き、石転沢の大雪渓を登る村井米子さん一行と会合、大雷雨の与四太郎ノ池で幕営。十七日飯豊山頂に別れて北股岳より湯ノ平温泉小屋へ降る。飯豊川も胎内川と同じくダム工事の車道が奥深く入り昔の面影はない。

九月三日、秋田支部の国体登山会議に、山形、福島支部長の出席があった。帰途折折温泉に泊る。待望久しかった月山の東側をさぐる。肘折温泉より念仏が原まで絶

てブナ林の裾み道。原は高山植物のお花畑、清川を渉って灌木帯を抜けると安山岩の露出した草原が頂上まで続く。林神官と語り、それより鍛冶小屋に泊る。

下山コースも東面の岩根沢口をとる。吹飛ばすような風も、大雪代をすぎると薄らぐ。清川小屋で一服、鳥川を渡り岩根沢三山神社まで長いが、その宏大な建物には吃驚した。それからの間沢駅までの長いこと。登りは十一時間半の緩歩。降りには長話で十一時間。この間登山者に一人も会わぬ単独行である。山形市に入り後藤恵治さんのお世話になってしまった。

肘折温泉丸屋も鍛冶小屋も登山者に親切で廉価。道は両方とも申分なく良好、月山東西の全貌を窺うには両コースとも絶好の位置を占めて花も豊富、気の遠くなるほど続くブナ林も美事。

馬鹿の一つ覚えのように山伏が法螺貝を吹いてる写真が代表する羽黒道ばかりが月山でない。月山の本質を知るために、もっと東側のコースが紹介されるとよい。

(三六、九、一三)



佐伯 富男氏 提供

こあいさつ

拝啓 時下愈御多様の段御喜びします。

御心配を御かけしましたヒマラヤ遭難もあれから三ヶ月、皆様方の御同情の下に事後処理も進み先般合同葬も滞りなく相済み有難く存じて居ります。

ランタン・リルン初登頂をして居りましたら元気に喜びの御挨拶に参りましたものをと初盆に際し故人を偲んで居ります。

故森本隊長は此度の遠征に御支援下さいました事心から喜び遠征記念品の事も考えて居りましたが此の様な結果となりまして今更致し方もありません。

つきましては委員協議の上で故隊長、隊員が撮影の写真の中から一葉を選びまして茲に御届け致します。

甚ださやかな記念品となりましたが亡き森本隊長、大島隊員並に山岳会員一同の感謝の意を表し度く存じますから御笑納下さい。先は右御礼迄 拝具

昭和三十六年八月

大阪市立大学山岳会

◇ 類縁入りカラー写真 ◇
一九六一年四月(午前中) B.C.C.
(四、八〇〇、三)

より見たキムシニ峰 (六八〇〇、三)
人物 左 故 大島 健司 司
右 藤 本 勇

⑨日大、北大ネパール遠征について、

・外貨申請については、九月九日高会長、折井、村木と関係者が話しあいの上決定する予定。

十月理事・評議員会

五日・ルーム

▽日高会長、理事渡辺、折井、太田、山崎、川上、金坂、村木、木下、田村、高橋、田辺、古沢、評議員藤島(敏)、交野、須賀東海支部長、初見、中野、小林(以上三名北大)

・委任、松方、浜野、日下田、徳久、松本、小原、神谷、今西、深田、青木、藤井、津田、池田
▽議事と報告

①山岳会財政の現況について (太田)

・会費未納35年度分まで三二〇名 (九月二十九日現在)
35年度会費収入 1,104,360円
支出 2,432,661円

・支出増にともない財政状態は苦しい。会費値上げの必要がある。
②ルーム・山荘基金募集について (太田)

(1) クラブ・ルーム移転(第一青山ビル合名会社社内、総額二二〇万円三階二〇坪。
(2) 上高地山荘(日本山岳会山岳総合研究所、総額二八〇万円。

・募金総額は五〇〇万円。
・募金については委員会をつくる
・この件について評議員会を開く

③上高地山荘について(折井)
・厚生省国立公園部には口頭で了解を得た。申請は近日中行う。十五名位宿泊可能、小屋審決定次第会員に連絡する。開所式は十月下旬に行う予定。

④海外遠征隊歓迎会について(折井)
・十一月下旬、年次晩餐会とかねて行う。

⑤第三次登山技術指導者講習会について(川上)
・場所、西穂高岳
・期日、昭和37年3月18、24日
・今年度が最終回となるので若い講師を集めたい。

⑥登山技術研究委員会懇談会について(高橋)
・十一月初旬、谷川岳付近にて行う予定。

⑦ルーム備付図書の新分類ができ上った。(折井)
・蔵書目録(和洋書とも)を作成し、会報付録として会員に配布するよう企画している。

⑧米国南極隊長であったフィン・ロン氏が講演旅行をしているので日本山岳会として日本に来てくれるように米大使館に依頼、OKをとった。

⑨ 東京支部15周年記念パーティを開催する
(木下)
(折井)

・期日、10月18日
・場所、国際文化会館
・会費、八〇〇円

⑩ 静岡支部について (金坂)

・後任支部長の選任について、理事会としての態度を決める必要がある。

⑪ 東京外語大蒙古遠征について (日高会長)

・無期延期。

⑫ 北大ヒマラヤ遠征について (中野)

・当初の目標ガンデロバ・ヒマールをチャムラン峰に変更。

・隊長 中野征紀、他隊員六名。
・期間 3月17日～6月26日

◇秋田・国体登山◇

第16回国民体育大会

・期日 昭和36年10月8日～13日
・会場 十和田・八幡平国立公園

(駒ヶ岳・乳頭山・八幡平)

大会々長には武田日本山岳協会会長、大会副会長に日高本会長、秋田県岳連会長荒巻広政氏が参与、副委員長に保坂隆司氏、技術委員長に高橋定昌、羽賀正太郎両氏が決定、本会から後藤、伊藤両支部長ほか会員多数参加した。



図書紹介

石井 鶴三

登山技術 (全三巻)

日本山岳会編

本会編集と銘うって三巻の登山技術書が発行された。内容は登山の基礎的事項から、かなり高度な技術の解説にまでおよんでおり、とくに雪崩や雪上技術など、従来の技術書にみられなかった研究が発表されている。将来海外登山にこそさそうとする若い人達に一読をすすめたい。編集は近藤等、金坂一郎、山崎安治の三人がやった。

昭和三十六年白水社発行、各巻五百円。

雪と岩

G・レビュファ著
近藤 等訳

写真をつんだに挿入した豪華な登山技術解説書である。その写真は、たんなる説明的なものではなく、美しいアルプスのムードをよく

くとりえ、写真集としても一頭地を抜いている。これがこの本の一つの特色といつてよいであろう。

著者レビュファは、現在フランスにおける第一級のクライマーであることはいうまでもないが、彼の持つすぐれたテクニックがここにあますところなく示されていて大変参考になる。氷雪の斜面にステップをきざみ、岩を攀じる彼の姿は、あたかもバレエ・ダンサーのような身のこなしをみせ、バランスとリズムの極致といつてさしつかえない。写真の構成はとくにすぐれているが、これだけのものをそろえるのは、恐らく非常な歳月と苦心がはらわれたに相違ない。要領よくまとめ上げられている解説は、三巻枚をこす写真の理解をよく助けており、人工登攀における埋めこみボルトの濫用をいましめている点などまなぶべきところが多い。

昭和三十六年八月新潮社刊、千五百円。

知床日記

木下彌三吉記念会

知床、北見の奥深くラウス岳の懷で、造材業を経営しつつ、半島を訪れる登山者に多大の便宜を与えられた木下さん(北大OB)は、荒涼とした知床の自然に一点ほ

LIST OF NEW PRINTS

(Oct.'60 Sept.'61)

- 1 ALPINE JOURNAL No. 301 1960-2
" No. 302 1961-1
- 2 CANADIAN ALPINE JOURNAL Vol. XLIV 1961
- 3 NEW ZEALAND ALPINE JOURNAL No. 47 1960
- 4 LA MONTAGNE ET ALPINISME No. 28 No. 29 No. 30 1960
- 5 JOURNAL Vol. 11-Nr. 9 1960
- 6 ÖSTERREICHISCHE ALPENZEITUNG Sept./Oct 1960
" Nov./Dez. 1960
" Jän./Feb. 1961
" Mär./Apr. & May/June 1961
- 7 RIVISTA MENSILE Vol. LXXIX-N. 7-8 1960
" Vol. LXXIX-N. 9-10
" Vol. LXXX-N. 1-2 1961
" Vol. LXXX-N. 3-4 1961
" Vol. LXXX-N.5-6 "
- 8 CLUB ALPIN BELGE Bulletin December 1960
" april 1961
" juin "
- 9 DE BERGGIDS September 1960

- " November "
- " Januari 1961
- " Maart "
- " Mei "
- " Juli "
- 10 MITTELLUNGEN DES DEUTSCHEN ALPENVEREINS
Mai 1960~März 61
- 11 APPALACHIA December 1960
" June 1961
- 12 APPALACHIA Bulletin July 1960~Dece 60
January 1961~August & September 1961
- 13 MAZAMA Vol. XLII, No. 13 December 1960
- 14 JUGEND AM BERG September 1960
- 15 HARVARD MOUNTAINEERING No. 15 1961
- 16 台湾山岳 第9期 第6号
第10期 第1号
- 17 FIRST INDIAN EXPEDITION TO MT. EVEREST (B.G. Singh)
- 18 NEPAL 1960-61 (日高会長寄贈)
- 19 HALF YEARLY NEWSLETTER No. 4 (Himalayan Mt. Inst.)
- 20 MT. COOK ALPINE REGIONS (MAP) (豊多摩山岳会寄贈)

(註) 1-18 会報
17-20 単行本・その他 (係・加藤元一)

東京支部報告

九月六日 理事会

①三十七年スキー講習会地選定の件、候補地猪苗代スキー場について、下検分報告があった。

(安彦、関口)

②新設スキー場開発の件九月五日日光高原山の鶏頂山スキー場新設(高原開発KK)研究会があり、安彦、関口出席。

③秋の懇親山行について

④九月会員集会の件二十日、ルームに於いて、夏山のスライド、8ミリを映写。

⑤ガルトゥン氏遺児育英資金募金の件支部としても、ルームにノートを備え協力する。

⑥支部創設十五周年記念行事について

十月四日 理事会

①支部創設十五周年記念行事の件記念パーティを行う。於麻布国際文化会館、十月十八日(水)午後六時、会費八百円、記念品を贈呈する。榎氏に講演を依頼する。

②十月二十二日の懇親山行は延期
③スキー講習会の件、一月十三日十五日、八子ヶ峰(前案の猪苗代は費用の関係で中止する。

折井、野田、安彦、中、関口、岩佐
西川、坂倉、三枝、山口、以上

☆のぼのとした人情の灯をともしれた人であった。

この日記は昭和三十年夏から三十四年秋まで、木下さんの事業所のあった岩尾別に建てられ、木下さんが生前愛好した岩尾別小屋を利用した人々が書き残した記念帳をもとに編まれたものである。羅臼や硫黄に登った人たちが思い思いの感想を綴っているが、公開を予期したものではないだけに読んで面白い。

初筆は山崎春雄氏一行。それから五年間におよそ二百六十人余りの人がこの木下小屋の客となつて出た。例えば『雪はふるふるリュックはぬれる越すに越されぬ羅臼岳、チャカホイチャカホイ(三一、二、二九)』などという戯れ書を読むと、雪に鎖された半島の冬の無聊さがしのばれるのである。木下氏の網走の自宅(木下鉄工場)を晴嵐荘という。巻末に晴嵐荘の記がある。

昭和三十五年一月八日、木下氏は急逝した。この日記は故人の遺志により上梓され、有志に配布された。そして八月七日、ラウス岳の肩に記念のケルンが積まれ、「限りなく知床を愛し、これを友に惜しみなく傾ちあえた木下弥三吉君(1909~1960)を記念して

北大山の会有志」と刻まれたレリーフ(佐藤久一朗氏作)がはめ込まれ、氏の徳を永く後世に伝えることになった。(F)

50頁、15×21cm、写真四、地図一、非売品、記念会代表館協操。

Olympia

No. 8, 1961, Oct.

体協、東京オリンピック選手強化対策本部より、昨年七月から出版されているもので、内容の主たるものはスポーツ生理学で、これを中心として諸方面にわたり理解しやすく書かれ、各項のはじめには編集部での大要と、取り上げた目的を明記し、また外国文献の引用にはその原著を明らかにするなど細かいところにも配慮がなされている。

最近号では特にトレーニングの諸問題を中心として各方面から突込んで書いており、その価値内容はきわめて高いものがある。

執筆者は各部門ともスポーツ医学の代表的立場にある方々によって担当されている。発行月は偶数月と定められている。

△本号内容▽

特集、ソビエトのスポーツ・トレーニング。体力、水泳中の筋電図。世界の動き。国内の動き。各国雑誌主要目次。

八〇頁、二百円

(田村 扇一)

谷におりつくとブヨブヨとウェヤンカヨックにかこまれた大きな氷河の舌端が眼前に迫り、その前のバンパにアルパカの群がコケをはんでいました。

3時20分、広大な南米特有のアパチエタ（峠）の上に立ちブバヤの山々に別れを告げました。

思えばブバヤは案外手強い山々でした。それでも発見した六つの未登峰の内、次の四つに登ることができました。

北からカニサヤ（5,750m）カバヤニ（5,700m）、ヤナオルコ（5600m）、アカマニ（5700m）。

いずれもすごい山ばかり、ピッケルの先なんかとても受け付けな氷壁、特に最後のアカマニは5350mのA・Cから登ったにも拘わらず登頂後5550mの壁でビバークしました。四峰といっても上からみるとあとの二峰はクレストに過ぎなかったり、岩のコブといったもので、実質的には全部登ったと同じでしょう。カミヨン（トラック）の来る日が決っているので、この二つは割愛しました。

最後に私もまた13日の午後4時45分、ウェヤンカヨック（5816m）の新ルートによる第二登頂をやりました。氷河の長い登りで57才の身には少し無理でしたが最後のガンバリを奮い起して1957年ドイツ隊が登ったあとをつぎました。隊員もまさかと思っていたほどの登攀をコノヤローという意気だけで登って来ました。私としてはこれが最高記録です。

これからいよいよ一路、東京に向って帰ります。一人の病人も怪我人も出ず、無事な姿で隊員を親ごさんのもとへ返すことができるようになり、隊長として本当にホッとしています。皆様によりしくお伝え下さい。（8月15日 三田副会長あて）

(III)

ご承知と思いますが、ボリビアのアポロバンバは約1月以上いました。登った山はパルーのブカイルカ北峰を入れると17座内ビルヘンが10座となりました。私もカカワイチョ（5450m）の初登頂とウェヤンカヨック（5816m）の新ルートによる第二登頂をやり、いささか嬉しくなっていますが、やはり57才の身には5800m以上は苦しいですね。それでも皆無事にラパスに着いて山の旅を終り、私の責任の大半は解消してホッとしましたよ。隊員の家族達もさぞ喜んでいてことと思います。

ブカイルカ北峰が山日記によると既登のようになっていきますので、我々の初登頂というのが東京で問題になっているということを高崎治部君からの手紙で知りましたが、これはクリンチのAAJに出した概念図が誤っていたので、我々の初登頂は間違いありません。

右が正しい順序で、中央峰もアンヘレス5.800
今年イタリー隊に登られたのでクリンチ6.000
す。私は帰路にサン・フランシスコに寄り、クリンチに会いま北6.050
すから彼の地図の間違いを指摘中中央峰6.000
しておきましょう。南峰6.040

8月22日に川崎公使の取計い南峰6.040
でボリビアの大統領に会見することができました。背の高い英国型の紳士でした。

大成功でおめでとうなんて言っていましたよ。

23日、福永代議士と共に公使館のジープで再びパルー領に入りました。

チチカカ湖畔のコパカバナ附近はまるで瀬戸内海のように美しい景色でした。ブノでは原田さんのご厄介になりました。

ブノからクスコまで約10時間の汽車の旅は快適でした。ブノ県からクスコ県に入る県境附近にいい山がありました。

クスコでは大村さんと河村さんの厄介になっています。

今日はサクサイワマン（鷲よ羽ばたけという意）その他のインカの遺跡を大村さんに案内して貰いました。竹田君達の登ったアウサンガタがよく見えましたよ。氷河の擦痕のついた大きな岩もありました。

明日はマーチュ・ピッチェーに行き、29日に私だけ先に飛行機でサルカントイを機上から見ながらリマに戻る予定です。

リマでは三菱の塩川さんとゴルフをやるのを楽しみにしています。ゴルフと言えばB・Cで毎日やっていた他、5200mの水原の上でもやりました。モン・ブランよりも高い処ですから恐らく世界記録ではないでしょうか。と言っても余り威張れた記録ではありませんがね。

J・A・Cの皆様によりしく。

クスコとはケチュア語で「臍・或は中心」と言う意味です。（8月25日 折井健一あて）

—カット・上田哲一—

「山岳」56年内容予告

- ・ヒマルチュリ登頂 山田 二郎
- ・ノシヤック登頂 酒井 二郎
- ・アビの登頂 津田 康祐
- ・ジュガル・ヒマル登山 伊藤 久行
- ・デオ・ティバ紀行 細川 多子
- ・チリ中央アンデスの山々 神戸 大山岳会
- ・大和山脈への旅 木崎 甲子郎
- ・ウエストン師の名刺と穂高登 横内 齋
- ・山同行者の日記 横内 齋
- ・石田吟松氏の写生帖に現われたウエストン師
- ・メンデンホール氷河橋本 誠二
- ・Le Rassemblement International d'Alpinistes に参加した
- ・クック山国立公園に於ける登山 岡村 雀
- ・ニュージールランドの山々 宇田川 允敏
- ・台湾の山 佐藤 泰・西丸 震哉
- ・台務報告 英文梗概
- ・写真三十葉 地図数葉 本文約二〇〇頁 一月刊行予定
- ・（編集者より）明大及び早大のマッキンレー紀行その他二、三の原稿は、再三依頼しましたが、遂にメ切日迄に到着せず、且つ予定頁を超過するため次号廻しのやむなきに至りました。（T.M）

アンデス通信(3)

一ポリビヤの山々

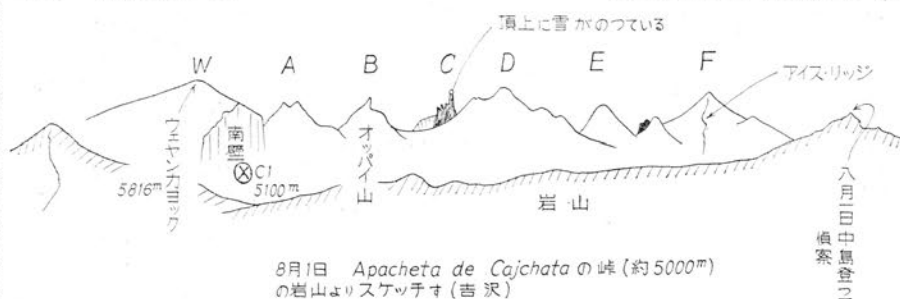


ウェヤンカヨックとブバヤ山群

一橋大学アンデス遠征隊長 吉沢一郎

(I)

われわれの旅も長くなり、そろそろ里心がついて来ました。東京は今、暑いさかりでしょう。この辺はとても寒いんです。ドイツ隊が1957年に初登頂したウェヤンカヨック(カニウマともハイチャ・クチャともいいます。5816m)の南壁の直ぐ下にいるのですが、ここからは5200mのピコイチロウ(仮の名です)と前記の山の右の山(A峰とする)とオッパイ山(B峰とする。おっぱいみたいでしょう)だけしかみえません。ピコ・イチロウへ登るとC峰、D峰、E峰、F峰がみえます。



B峰は8月8日、5時45分に丸山・中川が登り、9日午前1時にC1へ戻って来ました。F峰は別動隊の中村、中島、倉知がポーター2人つれて、もう一つ向うの谷へ入っているのでもまだ結果はわかりません。みな5700m級の未登峰ばかりですがF峰は偵察の上では氷のナイフリッジが300m続いているすごい山です。登れるかどうかかわからない位です。C峰はD峰と続いているらしくローソクみたいな岩峰で、頂上にちよっぴり雪がのついています。左側の岩稜には小槍や孫槍が三本突っただけです。それに続く氷河の面は双眼鏡でみると褐色の岩屑でよごれてみえます。

今日(10日)甘利隊が昨日のデボー地からさらにC2へ進み、明日このトルレ、デ、ポリビアーノ(仮称)とD峰への登攀を試みます。13日にはここにいる全員で南壁の左からウェヤンカヨックに登り、時間があればA峰を片ずけて来る予定です。

Wより先は大体南東に走っています。みな未登峰ですから愉快です。私も出来たらA一つ位は登りたいと思っています。皆真白い氷河の山ばかり。こんな素晴らしい山々がどうして今まで残っていたのか不思議ですが、多分、前山にかくれて遠くからは見えなかったからでしょう。

X

7月27日にペルー領内のチョコニャコータのベースから中島と2人で出かけそして初登頂したカカワイチョ(約5450m)のことも思い出となりましょう。大したことはなかったのですが、40m6ピッチの雪壁の登りは愉快でした。その代り氷河の舌端を離れてから暗くなってからはすっかり疲れてB・Cまでの長かったこと、漸くの思いでB・Cについた時はグッタリしてしまいました。

ポリビヤ山岳会と合同しましたが、彼等のダラシがないのには全く呆れました。まず第一にブバヤ山群なんて全然どこにあるのか知らないのです。一緒に来た2人のクライ

マーだって1人はとに角、他の1人は全く問題にならずしかも人にいわれなければ進んでなにもしない。CABはチャカルタヤのスキー場を中心とするスキー人の社交クラブと思って差支えないと思います。今後ポリビヤへ来

る遠征隊は総てを自主的にやる考えでないと所期の目的を完遂できないと思って下さい。(8月10日 三田副会長あて)

(II)

昨14日、全員元気でこのBCに集合しました。昨日、ウェヤンカヨックの氷壁の下 C1(5100m)をあとにしたのが東京への帰還第一日となりました。

カバイエヨ(馬)7頭。余った食料(それも殆んどアロス(米)だけ)テントやザイルを4頭につみ、私はお馬の背にゆられながらモレインのガラガラを下りて行きました。

小島 好殿
昭和三十六年四月十二日逝去
七十九才

(二一六号訂正)

誤 正

1頁5段 大島修司 大島健司君
「水晶岳から忍岡まで」

6頁2段 日和見つ 日和見をつづけて
6頁3段 昭和三十 昭和三十五年の夏

8頁1段 歩いたところ 歩いたところ
「混勿山の話」

◇東京支部クリスマス集の集い◇
・12月20日(水) ルーム・6時半
・会費三百円、50円のプレゼント持参
多数お集り下さい(委員)

昭和三十六年十月二十五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
社団法人 日本山岳会

編集者 古沢 肇
電話 神田(局)八九五二番
振替口座東京四八二九番

頒価二十円

印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地